

凍霜害の事後対策

南信農業試験場

南信地域では、本年4月中下旬に数日にわたり低温となり、果樹などに凍霜害が発生しました。次年度の果樹生産にも悪影響が懸念されることから、伊那園芸振興委員会の主催により、事後対策の技術指導会が開催されました。

南信特産の「市田柿」では、凍霜害の影響で芽が枯れ、不発芽がみられています。凍霜害の後に遅れて発生した新梢は、正常なものと比べて徒長しやすく、次年度の花芽が十分確保できない危険があります。30～40cm以上の徒長した新梢に対しては、花芽分化の始まる6月末頃に先端を摘心すると、次年度の花芽が形成しやすくなります。摘心の時期、摘心程度などについて、普及センター他関係機関と連携して試験を行う予定です。

日本なしでも、結実の少ない樹では樹体生育が旺盛になります。徒長枝や短果枝からの新梢が多発し、やはり次年度の花芽への悪影響が懸念されます。骨格枝先端部の誘引ひもをはずして、樹体の末端を高く維持すると、途中からの新梢発生を抑制することができます。併せて、不要な位置から発生した新梢の芽かきによる早期除去や、混み合っている短果枝を整理するなど、次年度の花芽の充実を図ることが重要です。



「市田柿」での対応
新梢摘心処理による花芽の確保



日本なしでの対応
誘引ひもをはずして先端を高くする

担当者	島津 忠昭	電話番号	0265-35-2240
-----	-------	------	--------------

[試験場だより 442号へ](#)

[南信農業試験場ホームページへ](#)